

道教と中国伝統医学（第28回黄庭経）

吉元 昭治

吉元医院

道教経典のなかに「黄庭」の名がつく一群がある。『黄庭経』については、すでに第88回総会で発表しているが今回はこれに補足追加しておきたい。「黄庭」の名がつく教典は『正統道蔵』『道蔵輯要』『雲笈七籤』その他から20種ばかりが集まった。

黄庭の名の上に「太上」とか「太清」がつくのもあれば、大別すると「内景経」「外景経」が多く『中景経』というものもある。一般に「外景経」の方が古いとされる。上清派の経典で魏夫人（魏華存、288年）が天から授かったものという。『蔵外道書』には『魏夫人伝』がある。いずれも主眼とするところは外丹法に対する内丹法（内視、内観、内切、存思、今日でいう気功にも関わる）で、精神を集中、黙想を静寂な環境で行い、神を見ることで長生を図り、病を治し予防するという養生法である。『内景経』『外景経』を比べると異同があり、巻首の部分メルクマールとすると『内景経』では「上有魂霊下関元 左為少陽右太陰 後方密戸前生門」、『外景経』では「上有黄庭下関元 後有幽門前命門」とあり違いがある。鍼灸でいうと少陽は少陽胆経、大陰は大陰肺経で前者は六腑のはじめ、後者は五臓のはじめ、左は陽、右は陰という関係もあり、また関元という字句は経穴名と同じである。こう見ると黄庭経と黄帝内経とは全く無関係だとい切れない面がある。黄庭経の方が人体をより宇宙観に近くみて、その表現も比喩的で隠語的である。

それでは「黄庭」というのはどのような意味があるのだろうか。

(1) 『黄庭内景玉経』梁丘子注巻上では「黄は中央の色、庭とは四方の中心である。つまり外には天中、人中、地中を、内には脳中、心中、脾中をいう」とある。

(2) 『黄庭内景経』務成子注脾長草では「脾は黄庭の宮」、『黄庭外景経』梁丘子注上部経では「黄庭とは脾で長さ一尺ばかり。太倉の上臍の上三寸にある」という。

(3) 『黄庭外景経』務成子注上部経では上、中、下の三黄庭にはそれぞれ上元、中玄、下黄老君か三老がいるとあり、

(4) 『黄庭外景経』梁丘子注上部経では上丹田つまり頭部にあるとするものもある。その他

(5) 精・気・神の収まる神室、すなわち下丹田というもの、『黄庭経講義 黄庭』では臍内の空隙を黄庭という。『黄庭外景経』務成子注上部経では黄庭とは目だとする。他に黄庭とは膀胱の上、臍の下、腎の前、肝の左、肺の右とするもの。脾胃の下、膀胱の上、心の北、腎の南、肝の右、肺の左にあり卵のようなどといろいろな解釈がされている。

『黄庭経』にはさらに道教の人体解剖学方面がある。『黄庭遁甲禄身経』『黄庭内景五臓六腑補瀉図』『上清黄庭五臓六腑真人玉軸経』などに見られる五臓神図などがそれである。人体各臓器、組織にはそれぞれ身神がいてそれぞれ神名がありその服装は色が異なり姿も異なっている。それぞれ働きが違い、その神を一心に祈ればやがて神は体の中に入ってきて、悪い処の臓器に働いて治してくれるし、普段から神を称えていれば病気になるはず長生きでき病気の予防、ひいては長生にかなうというのである。総会では身神名、脾と腎臓神のちがいなどを発表した。

なお、道教経典の古典『太平経』も道教身体観を知るうえに重要である。

また北京、全真教魏本山、白雲觀にのこる清末のものとして「内経図」は人体と宇宙の対比、体内の身神、またその機能を約60×120cm1枚の山水画に表現している見逃せないものである。